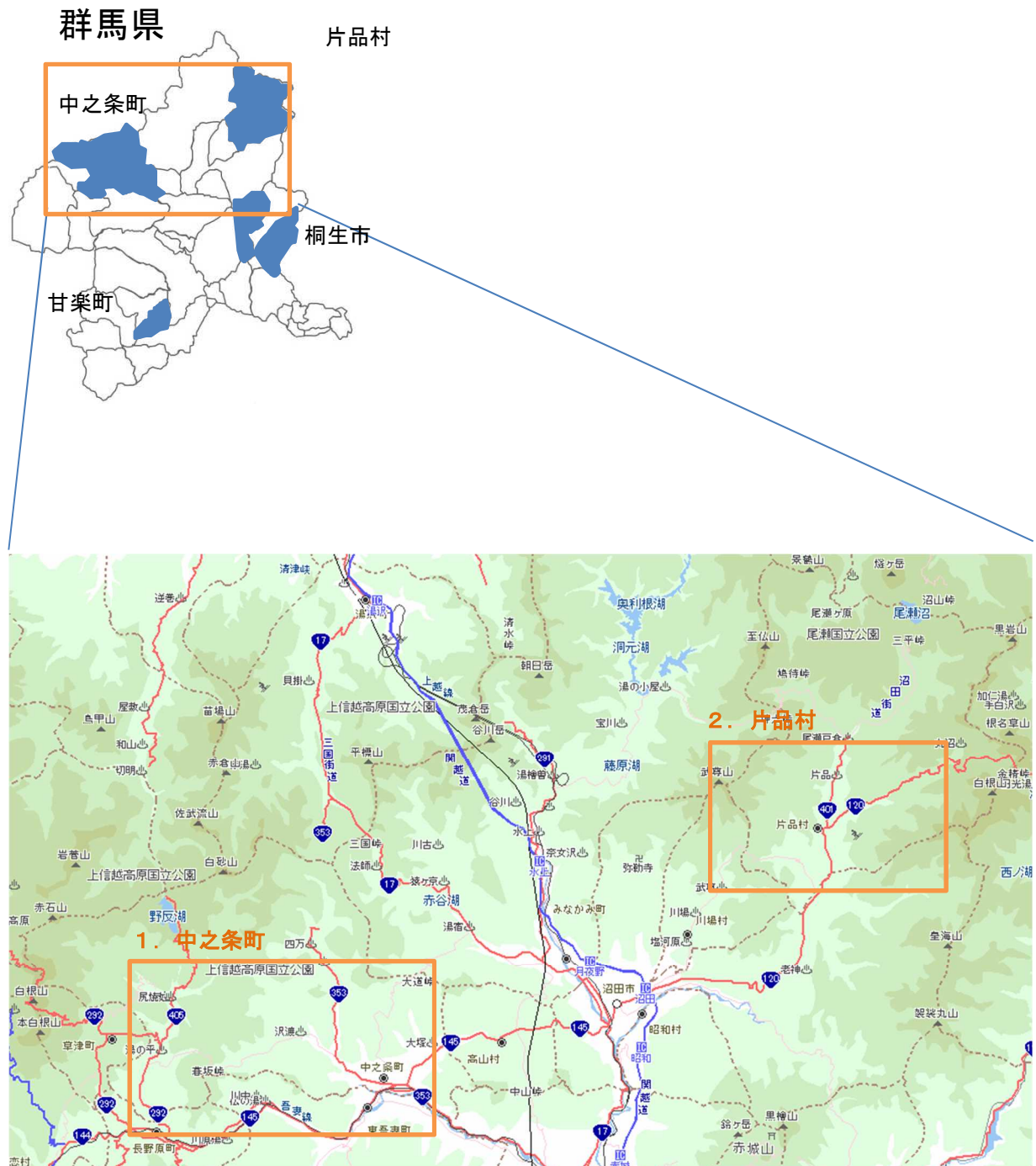


① 申請者	◎群馬県（桐生市、甘楽町、中之条町、片品村）	② タイプ	地域型 / シリアル型 A B C D E
③ タイトル			
かかあ天下ーぐんまの絹物語ー			
④ ストーリーの概要（２００字程度）			
<p>古くから絹産業の盛んな上州では、女性が養蚕・製糸・織物で家計を支え、近代になると、製糸工女や織手としてますます女性が活躍した。夫(男)たちは、おれの「かかあは天下ー」と呼び、これが「かかあ天下」として上州名物になるとともに、現代では内に外に活躍する女性像の代名詞ともなっている。</p> <p>「かかあ」たちの夢や情熱が詰まった養蚕の家々や織物の工場^{こうば}を訪ねることで、日本経済を、まさに天下を支えた日本の女性たちの姿が見えてくる。</p> <div data-bbox="197 925 1358 1355">  </div>			
⑤ 担当者連絡先			
担当者氏名	群馬県企画部世界遺産課 井上昌美		
電 話	027-226-2328	FAX	027-224-2812
E-mail	inoue-masami@pref.gunma.lg.jp		
住 所	群馬県前橋市大手町１－１－１		

市町村の位置図（地図等）



構成文化財の位置図 (地図等)

1. 中之条町



2. 片品村



市町村の位置図（地図等）



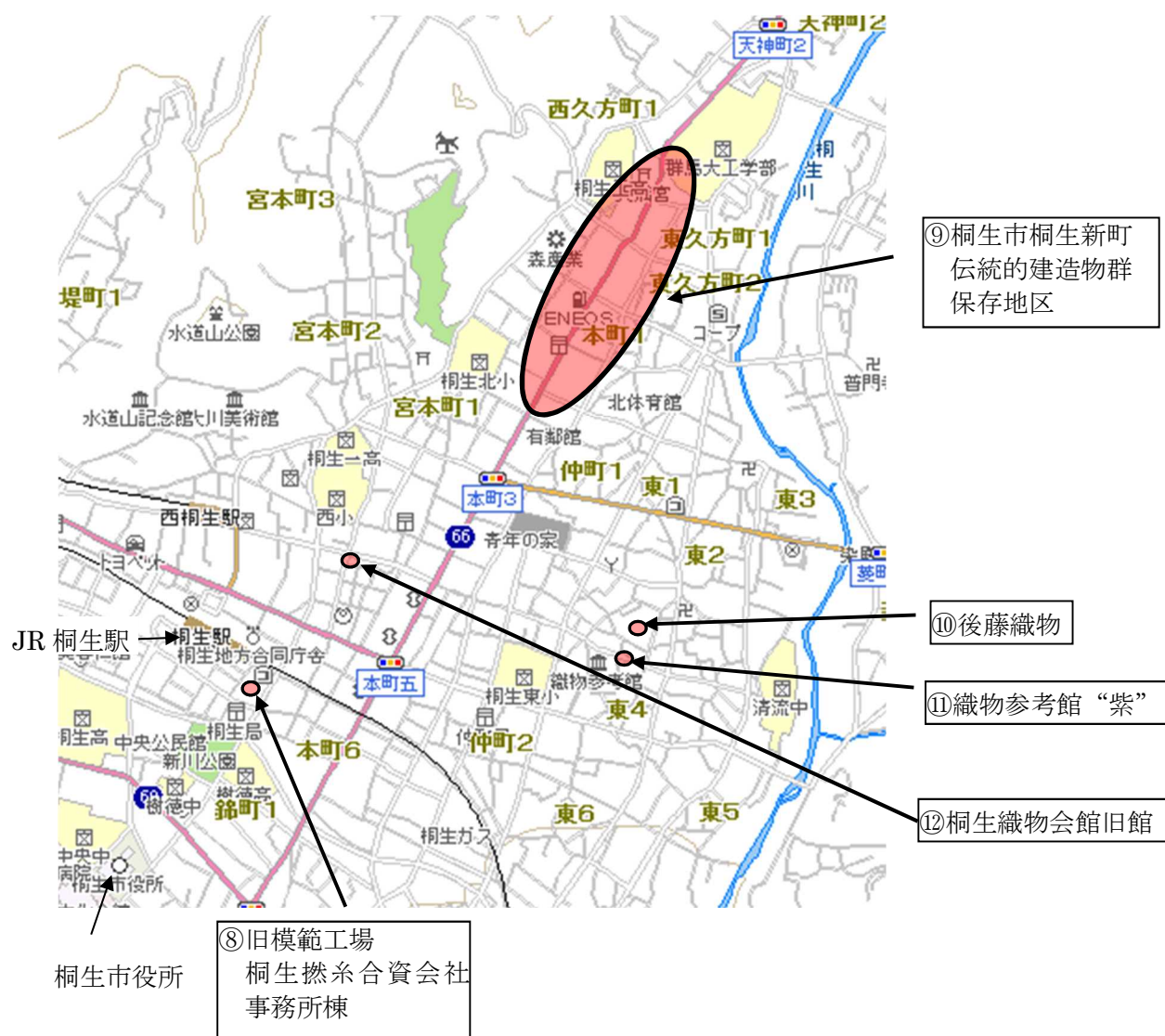
構成文化財の位置図（地図等）

3. 甘楽町



4. 桐生市





市町村の位置図（地図等）



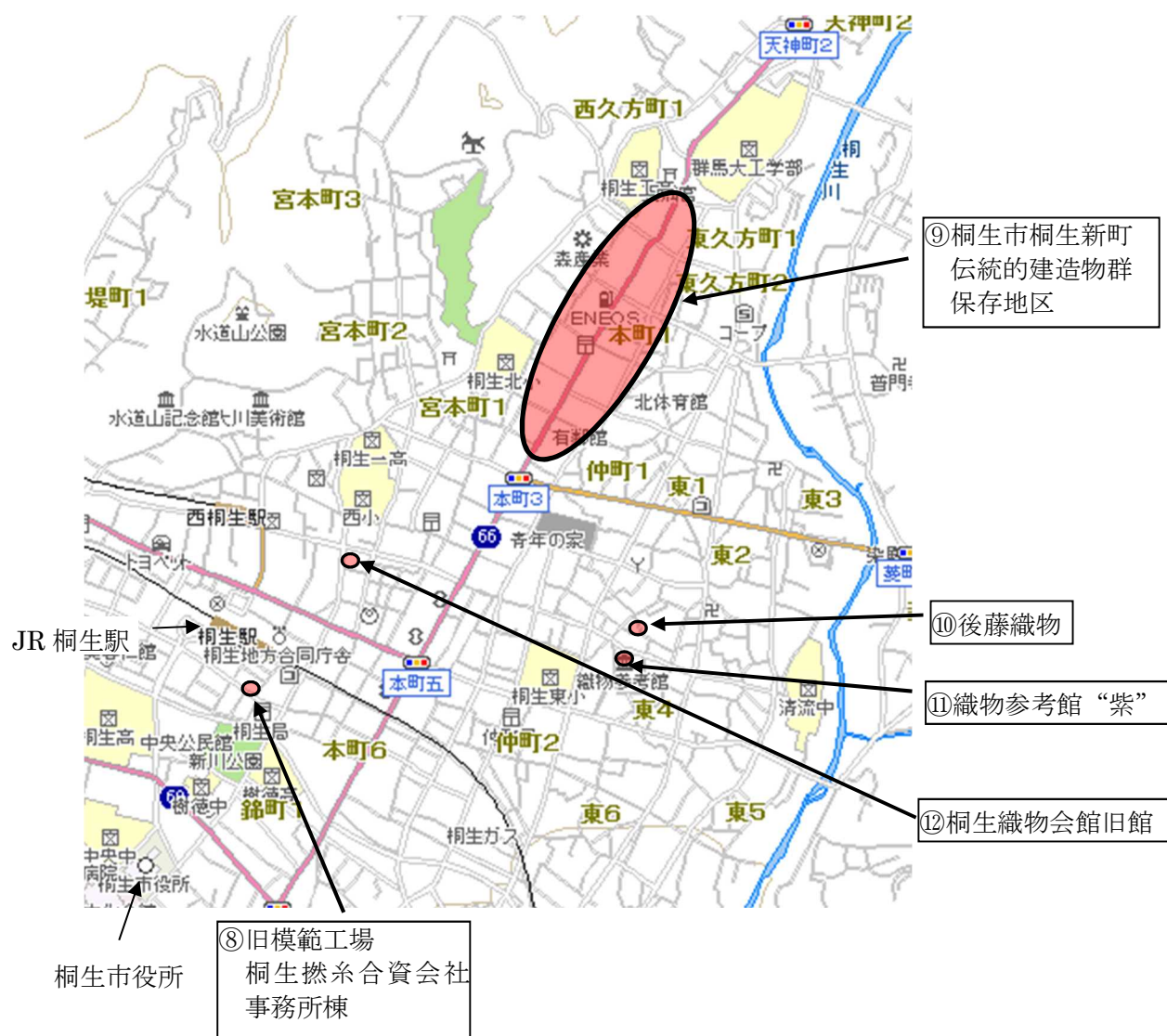
構成文化財の位置図（地図等）

3. 甘楽町



4. 桐生市





ストーリー

上州の農家には、大切にしまわれてきた絹の着物が眠っている。代々の女たちが、蚕を育て、糸をひき、布に織り、着物に仕立てた、晴れ着や婚礼衣装である。すべての技術は母から娘へ、地域の女達から少女達へと脈々と継承された。上州の女たち（かかあ）は、この養蚕・製糸・織物の力で家計を支え、家族の衣をつくった。男たち（夫）は、この働き者の女たちを「おれのかかあは天下一」と自慢し、上州名物は「かかあ天下」となった。美しい絹が織りなされる物語をたどると、日本独特の繊細なモノづくり文化とともに、誇りをもって家を支えた上州の女たちの姿が見えてくる。

機^{はた}の音、製糸の煙、桑の海

絹は、蚕という虫が作る繭から作られる。蚕は繊細な虫で、「お蚕さま」と呼ばれ、子どものように、家の中で大切に育てられた。蚕の世話は、家の中を切り盛りする女たちの重要な仕事である。特に、成長期には寝る間を惜しんで蚕に桑の葉を食べさせなければならない。女たちは、蚕の世話、他の農作業、食事作りと休む間もなく働き、農家の働き手の中心として活躍した。

そして、幕末から明治へ、上州が群馬県と変わる頃、絹が主要な輸出品として外貨獲得の切り札となると、県内の養蚕・製糸・織物はますます盛んになった。明治の文豪、徳富蘆花は当時の群馬県の様子を「機^{はた}の音、製糸の煙、桑の海」*と詠んでいる。この時代の流れに乗って、上州の女は益々活躍の場を広げるのである。*徳富蘆花の随筆「上州の山」明治32年

農家の財布の紐はかかあが握るべし

明治5年「富岡製糸場」が創業し、全国から少女たちが製糸工女として、また地域からは大量の繭が原料として、富岡に集められた。このような時、片品村の養蚕農家に嫁いだ「永井いと」は夫、紺周郎とともに繭増産のための養蚕技術の改良に挑み、夫亡き後もその意志を継いで、遂には永井流養蚕法の伝習所を設立した。いとは自ら教壇に立ち、講義の中で「**農家の財布の紐はかかあが握るべし**」と説いたという。農家の現金収入源である養蚕で、女性が活躍していたからこそその言葉である。

邑ニ養蚕セザルノ家ナク製糸セザルノ婦ナシ

やがて、女たちは養蚕や繭作りだけでなく、繭から糸を繰り出す技術（座繰り繰糸）にも磨きを掛けていった。このような農家は、組合製糸という形で共同して生糸を販売するようになり、糸の品質でも、生産量でも器械製糸に劣らず、日本の経済を支える存在となった。組合製糸を代表する甘楽社の碑には、「**邑ニ養蚕セザルノ家ナク製糸セザルノ婦ナシ**（村で養蚕をしていない家はなく、製糸をしていない女はいない）」とあり、まさに上州の女たち（かかあ）の活躍が印されている。彼女たちは、生糸を売って現金収入を得る傍ら、自家用の糸を少しずつ確保し、機織りをし、自分や家族の晴れ着を仕立てることも忘れなかった。そして、その着物と技術とを代々引き継



永井いと

いでいくのである。

西の西陣、東の桐生

日本製の生糸が世界を席巻するなかで、また、絹織物も発展していった。桐生は江戸時代から「**西の西陣、東の桐生**」と言われるように高級な絹の織物産地として知られていた。この桐生を支えたのも機織り女と呼ばれた周辺の村から集まった女たちであり、織物を伝えた白滝姫を祭る神社には、多くの機織り女が、織物の上達を願ってお参りした。

明治に入るとこの桐生の町並みには、ノコギリ型の屋根が特徴的な織物工場が数多く建てられていった。その中でさらに多くの女たちが織手として活躍した。また、撚糸*、染色、機拵え**にも女性たちが従事した。彼女たちが仕事の合間に外食をしたり銭湯に行ったり、お気に入りの着物や、時には洋服を着て歩いたりした町には、女性たちが活躍した足跡、商家や工場の町並み、その奥には寄宿舍や銭湯もしっかりとのこっている。桐生はそんな近代の女性たちの生活をずっと見つめてきたのである。*織物の種類に合わせて糸によりをかける作業。**紋織りのための準備作業。

現代の群馬にも、日本の絹織物の技術や文化が受け継がれている。農家の女性たちが生産に励む傍ら、自分や大切な家族のためつくった着物は、今でも大切に保存されている。織物の桐生には現在でも熟練の女性職人が働く現役の工場がある。日本伝統の美しい着物を着ること、そして懐かしい農家や織物の町並みを訪ねることで、日本を支えてきた「かかあ」たちの心に触れることが出来る。

「かかあ天下一ぐんまの絹物語ー」は、家族と地域を、そして日本を支えてきた女性「かかあ」たちの姿を、実際に、蚕に触れたり、繭から生糸をひいたり、絹布を織ったりして、体感していく物語である。

女性が絹の生産で活躍した家々。

機之音、製糸の煙、桑の海

富沢家住宅、中之条町六合赤岩伝統的建造物群保存地区

女性養蚕指導者「永井いと」の功績を物語る建物

農家の財布の紐はかかあが握るべし

永井流養蚕伝習所実習棟

女性たちが座繰りでひいた糸を集め、輸出した組合製糸の代表的遺産。

旧小幡組製糸レンガ造り倉庫、

邑ニ養蚕セザルノ家ナク製糸セザルノ婦ナシ

甘楽町の養蚕・製糸・織物資料、甘楽社小幡組由来碑

織都桐生で、織物伝来の伝説を物語る神社から、今も女性が働く工場まで巡る。

白瀧神社、旧模範工場桐生撚糸合資会社事務所棟、

西の西陣、東の桐生

桐生市桐生新町伝統的建造物群保存地区、後藤織物、織物参考館“紫”、桐生織物会館旧館



ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
①	とみざわけ 富沢家住宅	国重文 ぐんま絹遺産	江戸後期の大型養蚕農家で、地元の村の名主を代々つとめた旧家である。運送業や金融業を行う一方、女性たちによる養蚕による功績は大きい。	中之条町
②	なかのじょうまちく 中之条町六合 あかいわ 赤岩伝統的建造物 群保存地区	国重伝建 ぐんま絹遺産	明治後半から昭和中期にかけて養蚕が盛んに行われた地区で、集落の発展は養蚕や織物等で生計を支えた女性たちの活躍による所が大きい。	中之条町
③	ながいりゅうようさん 永井流養蚕 でんしゅうじょ 伝習所 じっしゅうとう 実習棟	村重文 ぐんま絹遺産	永井いとが、亡夫紺周郎の遺志を継いで設立した、永井流養蚕法の伝習所。講義の中で「農家の財布の紐はかかあが握るべし」と説いたという。	片品村
④	きゅうおばたぐみせいし 旧小幡組製糸 レンガ造り倉庫	町重文 ぐんま絹遺産	大正15年に甘楽社小幡組製糸工場の繭倉庫として建設されたレンガ造りの2階建ての建物。養蚕農家各家の女性を中心となって座繰りでひいた生糸をもちよって、作業場で品質をそろえて共同販売した。	甘楽町
⑤	かんらまち ようさん 甘楽町の養蚕・ せいし おりものしりょう 製糸・織物資料	ぐんま絹遺産	大正初期には約7割の世帯が養蚕農家だった甘楽町で使用された養蚕・製糸・織物に関する道具や資料333点。	甘楽町
⑥	かんらしゃおばたぐみ 甘楽社小幡組 ゆらいひ 由来碑	ぐんま絹遺産	大正6年3月に甘楽社小幡組組合員が、歴史を後世に伝え、益々の隆盛を図るため、小幡組由来碑を建設した。この石碑には、「邑ニ養蚕セザルノ家ナク製絲セザルノ婦ナシ」とあり、当地域の養蚕業と、それをけん引してきた女性達の関わりを伝える貴重な史料。	甘楽町
⑦	しらたきじんじゃ 白瀧神社	ぐんま絹遺産	桐生地方に絹織物の技術を伝えたと言われる白瀧姫を祀る神社。この織姫の伝説は江戸時代に確立し、絹商人や機織り女たちの信仰を集めた。	桐生市
⑧	きゅうもはんこうじょう 旧模範工場 きりうねんし 桐生撚糸 ごうしがいは 合資会社 じむしょとう 事務所棟	市重文 ぐんま絹遺産	明治から戦前まで稼動した大規模撚糸工場であり、工場内に学校を設置するなど女工に技術と教育を施し、会社が発展した。戦前の様子が動画に残っている。	桐生市
⑨	きりゅうしきりゅう 桐生市桐生 しんまち 新町伝統 的建造物群保存地区	国重伝建 ぐんま絹遺産	桐生織物の中心地として経済発展を支えてきた地区。商家と共に織物工場や寄宿舎、銭湯などが残り、工場の形態や女工の暮らしが偲ばれる場所。	桐生市

⑩	ごとうおりもの 後藤織物	国登録 ぐんま絹遺産	明治初期に洋式染色技術を導入し、織物の改良を行った工場。現在も帯地など織物生産を行っており、熟練の女性従業員が従事している。	桐生市
⑪	おりものさんこうかん 織物参考館 “ゆかり” 紫	国登録 ぐんま絹遺産	高級織物であるお召しの技術を今に伝え、織物会社とともに織物資料館を運営している。手織り機などの道具を公開し、女性従業員による説明や実演を行っている。	桐生市
⑫	きりゅうおりもの 桐生織物 かいかんきゅうかん 会館旧館	国登録 ぐんま絹遺産	桐生織物向上のために設立された桐生織物同業組合の事務所。かつて女子職員が電話交換手やタイプライター事務員などを務め業務を支えていた。現在は織物記念館として織物資料展示や物販が行われている。	桐生市
⑬	ながい 永井いと像	ぐんま絹遺産 (申請中)	永井いとは、夫紺周郎と共に永井流養蚕法を開発。夫亡き後に伝習所を設立し、養蚕法の講義の中で「農家の財布の紐はかかあが握るべし」と説いたという。かかあ天下の象徴的な人物。	片品村

(※ 1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

(※ 2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること(例：国史跡、国重文、県有形、市無形、等)。

(※ 3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること(単に文化財の説明にならないように注意すること)。

(※ 4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること(複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること)。

構成文化財の写真一覧

① 富沢家住宅



② 中之条町六合赤岩
伝統的建造物群保存地区



③ 永井流養蚕伝習所実習棟



④ 旧小幡組製糸レンガ造り倉庫



⑤ 甘楽町の養蚕・製糸・織物資料



⑥ 甘楽社小幡組由来碑



⑦ 白瀧神社



⑧ 旧模範工場桐生撚糸合資会社事務所棟



⑨ 桐生市桐生新町
伝統的建造物群保存地区



⑩ 後藤織物



⑪ 織物参考館“紫”



⑫ 桐生織物会館旧館



⑬ 永井いと像



(拡大)

